

氏名 み うら けん
三 浦 健 講師



主な研究テーマ

□バスケットボールにおける対戦チームのキープレイヤーに対するディフェンス面での実践事例

平成26年度の研究内容とその成果

I. はじめに

バスケットボール競技において、対戦相手のキープレイヤー（攻撃の起点、得点源等）への対策を立てて試合に臨むことは、重要な戦術の一つです。対戦相手との試合前に、他のチームの試合や、自チームとの1戦目をスカウティングして、キープレイヤーの特徴を分析し、対策を立ててから試合に臨むことは、大部分の指導者が実践していることです。本研究では、キープレイヤーへ対策を立てて試合に臨み、一定の成果を上げた事例を紹介し、その効果について検証しました。

II. 方法

対象は、相手チームのキープレイヤーへの対策を立てて臨んだA大学と、キープレイヤー2名がいるB大学です。B大学のキープレイヤーC選手（186cm）には、D選手（181cm）を、もう1名のE選手（184cm）にはF選手（175cm）をそれぞれマッチアップさせました。対象試合は、インカレK地区予選を兼ねたK学生バスケットボール男

子1部リーグ戦のうち、1次リーグのA大学（71-95）B大学、約1ヵ月半後に行われた決勝リーグのA大学（74-75）B大学の計2試合でした。

III. 実践記録および事例の提示

1. 対策を立てる前（1次リーグ）のC選手、E選手の特徴

1次リーグにおいて、C選手については、身体能力が高く、ディフェンス力のあるD選手がC選手を抑えてくれるだろうと考え、特に対策を立てることなく、自信を持ってD選手をマッチアップさせました。E選手については、スターティングメンバーでなく、左効きのプレイヤーであること位の特徴しかF選手も指導者も持っていませんでした。この結果、C選手には29得点、E選手には32得点と十分な活躍をさせていただきました。プレイスタイルにおいては、C選手は右手ドリブルを多用し、E選手は極端な左利きのプレイヤーであることが分かりました。

2. 1次リーグ後のC選手、E選手へのスカウティングをして立てた対策について

D選手、F選手とビデオ分析を実施し、その後決勝リーグでの2名の選手への対策について話し合いました。この結果、C選手には、「C選手がボールを持ったら、得意の右手のドリブルを極力させないように、D選手はC選手の右側にかぶり(図1)、左手のドリブルをさせる。」という対策を立てました。また、E選手には、「E選手がボールを持ったら、左手のドリブルを絶対にさせないように、F選手はE選手の左側にかぶる。」という対策を立てました。



図1 体をかぶる

3. 対策を立てた後(決勝リーグ)の評価

表1は、十分な活躍をされた1次リーグと、対策を立てて臨んだ決勝リーグにおけるC選手、E選手の個人データの比較です。

表1 B大学のキープレイヤー2名の1次リーグと決勝リーグの個人データの比較

選手	C選手								E選手															
	1次リーグ				決勝リーグ				1次リーグ				決勝リーグ											
①得点	29点								36点								32点				9点			
②アシスト	4回								5回								1回				0回			
③出場時間	39分								40分								33分				16分			
④ボール保持割合	28.8%								29.8%								16.3%				9.1%			
⑤ドライブイン回数割合	右		左		右		左		右		左		右		左		右		左					
	10回	7回	10回	13回	3回	4回	0回	1回	58.8%	41.2%	43.5%	56.5%	42.9%	57.1%	0%	100%								
⑥ドライブイン→シュート	右		左		右		左		右		左		右		左		右		左					
	イン	アウト	イン	アウト	イン	アウト	イン	アウト	イン	アウト	イン	アウト	イン	アウト	イン	アウト	イン	アウト	イン	アウト				
	1本	6本	2本	4本	3本	1本	1本	2本	3本	0本	1本	3本	0本	0本	0本	0本	0本	0本	0本	1本				
⑦ドライブインを狙ったが攻撃に結びつかないプレイ	5回								10回								2回				5回			
⑧ドリブルミス	0回								4回								0回				1回			
⑨ドリブル→止まってシュート	右		左		右		左		右		左		右		左		右		左					
	イン	アウト	イン	アウト	イン	アウト	イン	アウト	イン	アウト	イン	アウト	イン	アウト	イン	アウト	イン	アウト	イン	アウト				
	2本	4本	3本	5本	4本	4本	6本	5本	0本	0本	0本	2本	0本	0本	0本	0本	0本	0本	0本	1本				

(1) キープレイヤー2名に対する評価

表1の結果から、E選手については成功したものの、C選手に対しては、①個人得点を上昇させた点では不十分だったと考えられました。

(2) B大学の得点の減少について

A大学がC選手に不得意な手でドリブル

をさせる(C選手が嫌がるプレイ)

対策を立てたことにより、以下の3項目のプレイを変化させることができました。

- 1) B大学の攻撃パターンの一つである、C選手の⑥ドライブイン→シュートの回数を減少させた。
- 2) C選手が起点となって得点につながる

一連の攻撃を分断した（B大学の攻撃のリズムを狂わせた…⑦ドライブインを狙ったが攻撃に結びつかないプレイの増加）。

3) C選手の⑧ドリブルミスを誘った。

したがって、A大学の対策は、B大学の得点の減少という点では一定の成果が認められました。

(3) C選手のプレイスタイルの変化について

しかし、C選手は、ドライブインをせず、ジャンプシュートに対応する変化をすることにより個人得点を増加させました。A大学は、C選手への対策への1)～3)での変化を評価するあまりに、C選手のこの変化を見落とすことになりました。このことが、決勝リーグでのA大学の1点差負けという結果の大きな要因となってしまいました。

これからの研究の展望

今回は、決勝リーグでA大学は、リードしておきながら、終盤でB大学のC選手に決勝得点を決められてしまい敗戦したケースについて振り返り、その前のタイム・アウトでの指示不足についての反省点を紹介します。

なお、本研究の詳細は、スポーツパフォーマンス研究 (<http://sports-performance.jp/>) に掲載されていますので、お立ち寄り下さい。